慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	表紙 目次
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1956
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.49, No.4 (1956. 4)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19560401--001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田學會雜誌

慶應義塾經濟學會

四月號

論說

價値論からみたケインズ『一般理論』……遊部久藏(一)

D・リカードの「賃勞働」問題の分析視角……井村喜代子(二四)

書評及び紹介

經濟學關係文献目錄

第四號　第四十九卷

三田學會雜誌　昭和三十一年三月號　定價　金七〇圓

MITA GAKKAI ZASSHI

(Mita Journal of Economics)

Vol. 49, No. 3　　March, 1956

CONTENTS

Page

Linear Programming: The Duality Theorem.....*M. Fukuoka* (1)

Economic Planning and Utilization of the Law of Value.....*H. Kato* (11)

Prof. Duesenberry on the Theory of Investment .....*I. Okuma* (25)

Contributed specially

On the Discovery of Andō Shōeki's Native Place and Relatives .....*D. Watanabe* (35)

Japanese Economic Thought .....*M. Bronfenbrenner* (1–10)

—A Foreigner's-Eye View—

Reviews and Notes

Published for

KEIO-GIJUKU KEIZAI GAKKAI

(The Keio Economic Society)

Editorial communications to be sent to the Editor, Keio-Gijuku Keizai Gakkai, Keio-Gijuku University, Mita, Minato-ku, Tokyo, Japan

Price 70 yen

書評及び紹介

田中惣五郎著『幸德秋水――一革命家の思想と生涯』……飯田鼎（四三）
山極圭司著『木下尙江――一先覺者の闘いと惱み』……大島通義（四八）
武田隆夫・遠藤湘吉・大內力著『近代財政の理論』……寺尾誠（五一）
プレハーノフ著 西牟田久雄・直野敦譯『歷史における個人の役割』……加藤寛（五五）
ハーサナイイ『基數的厚生・個人主義的倫理・效用のインタパースナルな比較』……古田精司（五七）
U・K・ヒックス著『英國財政、その構造と發展、一八八〇年―一九五二年』……井村喜代子（六三）
W・S・ヴォロディン『ケインズ――獨占資本のイデオローグ』……

價値論からみたケインズ『一般理論』

遊部久藏

近代經濟學はしばしば價値論なき經濟學であるといわれている。もちろんオーストリア學派においては、勞働價値說に對抗する主觀的な效用價値說が存するのであるが、一般均衡理論を根幹とするローザンヌ學派においては事實上また實際上、勞働價値說も效用價値說もふくめて一般に價値論は否定されることとなつた。イギリス經濟學の傳統に立脚するといわれるケムブリッジ學派においてはどうであろうか。このことを私たちはケムブリッジ學派の發展形態としてのケインズ學派についてみようとするものであるが、さしあたり、ケインズの『雇傭、利子および貨幣の一般理論』を檢討の對象とする。但しこの小稿においては主として價値尺度論の觀點から、ケインズの勞働單位論が考察の對象とされ、價値の實體の問題についてはおわりに附隨的に論及されるにすぎない。じつはこの最後の問題を手懸りとして、生產物價値の分割や、剩餘價値の起源や、物價水準の決定の問題にまですすむ豫定であつたが、枚數の關係上、これらの問題については、他の機會にゆづることとする。

結論を豫示すれば、『一般理論』においてはイギリス古典派經濟學の最高の成果である勞働價値說は單なる連想として存在するにすぎない、その實質はもはや存在しない。むしろ全體の論理構造からみれば、それは主觀的價値論の系譜につらなるものである。私たちはマックラケンがマルサスのうちにオーストリア學派へのみちを見出したと同じような意味で、オーストリア學派からケインズへのみちをたどることが可能であると思う。このことの解明も私たちの將來の課題となるであろう。

（註1） H. L. McCracken; Value Theory and Business Cycles. 1933. p. 14, 135.

一

經濟現象はさまざまの量的關係としてあらわれる。したがつて量的關係を正確にあらわす單位の決定ということが重要な課題となる。ケインズ自身つぎのようにのべている。「いうまでもなく、われわれの數量的分析は、いかなるものにもせよ數量的に曖昧な表現を